

## ② 親と子の心の絆は

■山田和恵

### 1―はじめに

1990年代に入り、国や地方自治体等行政の中で「育児支援」という言葉が使われ始めた。かつては「子育ては各家庭での個人的なこと」であり、家庭・地域社会・学校や保育園・幼稚園の自然な信頼関係の中で子どもは育つていくものという通念があったように思う。ところが高齢化社会・少子化が進み、人口減少が様々な深刻な問題を生み、行政の施策や日本の将来にまで影響し始めたために、育児支援事業の必要性が考えられるようになった。それは、核家族の中でとても懸命にしかも孤独に乳幼児を育てながら、育児不安感・困難感を抱く(訴える)母親が増え始めた現象を、数年後追いついて始まった。また実際に、乳幼児から思春期までの親子・家族の問題を考え直させられるような事件も、ここ数年次々と起きてきた。

たい。

### 2―子どもを可愛く思えない

近年わが子、特に第1子を可愛く思えず、毎日怒鳴って叱り続け、たたいてしまうという母親からの相談を受けることが多くなつた。自我の成長ゆえのわが子の自己主張が許せないという。4、5歳児の母はもちろん、1、2歳児の母が叩き、時には殴るけるさえして驚かされる。虐待に近い内容の時がある。どんなに冷酷で母性の欠落した女性かと思われがちだが、そうではない。1人ないし2人の子どもを熱心に育てようとしていながら、自らがシユミレートしていた子育てと現実の違いに苛立ち、絶えず子どもに腹を立て、しかも自責的になって苦しんでいる。

母乳か人工栄養かに始まり、離乳食・トイレットトレーニング・言語発達・歯磨き・虫歯予防・衣服の着脱・お絵描き・鉄の使い方・鉄棒の逆上がり・自転車補助輪し等々を、非常に細かいチェックリストがある発達課題であるのかごとく、次々と気に病んでは焦り、苛立っている。偏食もあってはならない。「苦手」を作りたくないという思いがとても強い。誰とでも仲良く遊べる、元氣

な協調性の高い子ども像を先に思い描きすぎで、やんちゃな子・乱暴な子・引つ込み思案な子は許し難くなる。目の前のわが子の個性の素晴らしさや、持ち味の違いを面白がるゆとり等がなく、子育て上手のやさしい母親になるはずだった自らが打ちひしがれ、挫折感を味わっていたりする。しかも身近な同年齢の子や、その親と絶えず比較して悩んでいる。

このような乳幼児の母親たちに共通している傾向として、とてもまじめで几帳面に家事育児に取り組んでいる点が挙げられる。中には強迫的なこだわりさえ見られる。子への過干渉から、子どもは常によい子でいようと無理をしていたり、いつも緊張状態で萎縮し表情が乏しかったりする。時にはチック・頻尿・円形脱毛等が一過性に見られたり、ストレスが身体症状や情緒に出易い子もいる。

いずれの場合も、母もつらく悩んでおり、子どもも基本的信頼感・安心感が得られないままである。母(養育者)を通じて、この世界を安心に満ちた信頼に足るものと実感できないまま不安定な世界観をもってしまうと、自信を持って力を発揮できず、自分を愛する(自己中心的ではなく)ことも、他者を愛する(存在を尊重する)ことも苦手になってしまう。就園・就学後、更には思春期以降の社

- 1―はじめに
- 2―子どもを可愛く思えない
- 3―多様化の中で価値観を伝える
- 4―思春期以降に問われる親子の絆
- 5―まとめ

会適応にも影響してくる。

子どもを十分に甘えさせることと、甘やかすことの区別が日頃曖昧になっている傾向が強いが、母原病的に母の子育てを批判すれば問題は解決するかというと、そう単純な構図ではない。多くの母親は、実家に相談すると逆に非難を受けて傷付けられたり、頼れずにいる。また、案外若い世代の父親も、母親の子育ての苦勞に無理解・非協力だったりして、父親への不満・怒りを子につけてしまっている母親が驚くほど多い。父親——夫に向けられるべき怒り、時には憎しみの捌け口が子どもになってしまおうという。子育ての努力を夫から評価されない母が自己不全感から、子を可愛いと思う気持ちが失せていることが多い。家族力動の中で、怒りや攻撃性——言葉や力での暴力はいつも強者から弱者に伝播していく。両親のコミュニケーション不全が、母子・父子のコミュニケーション不全を生み、このような家族では、互いの愛情は夫婦間であれ、親子間・兄弟間であれ、ありのままに伝え合えず誤解を生んでいく。そして、思春期に力関係が逆転していく場合もある。

ここでの育児支援とは、既に市内各区子ども・家庭支援相談（旧・子ども・家庭支援センター）や育児支援センター園で、より虐待に近い場合は各児童相談所等で行われてきたところであるが、実は深い家族病理と関わりながら、子どもの発達を（観（診））ていく専門的見識と温かく具体的なアドバイスをしている支援者としての力量が、常に問われているところであろう。先ずは母のつらさ・苛立

ち・焦り・訴えを丸ごと聞き、母を決して非難しない。すると、共感する中での具体的な子育てのスキルやアドバイスなら、とても素直に聞き入れられ、家庭で良き変化が生まれる。母（養育者）を救い、マザリングのスキルを伝え、わが子の持ち味の素晴らしさ・可愛さに気付かせる指摘をしていって初めて、子どもたちは救われている。多くの母は、乳幼児の発達で最も重要なことは、集団で楽しく自己を発揮し、他を思いやる協調性の大前提に、基本的信頼感・安心感を子どもが実感し、内在化させていくことだと知らねばならない。

近年の親達の最も苦手とするところは、ただわが子とボーッとして時間を過ごすことや、じっくり見守って待つてあげることである。社会の動きが速く、経済効率を高め、無駄を嫌う風潮の中で、このシンプルな親子のあり方が、むしろとても難しくなっている。

### 3 一多様化の中で価値観を伝える

学童期以降個々の子どもに提供される教育環境はまだまだ画一的ではあるが、多様化している。普通級の他に、個別支援学級も充実しており、通級学級や不登校児生のための適応指導教室・相談指導学級や学生の家庭訪問事業も効果を上げている。

しかし、乳幼児期から旧保健所でフォローアップを受け、地域療育センターでも支援を受けていた子ども達の中には、十分に適切な教育プログラムや教育環境を得ていない場合が多く見受けられる。保護者が、わが子の発

達を客観的に将来の見通しをもった認識を持っていない場合もある。が何よりも、ADHD（注意集中困難多動性障害）や高機能自閉症やアスペルガー症候群を疑われる子ども達や、知的に境界水準にある子ども達個々に適したプログラムが、公教育の中に不足し用意されていない実情が深刻といえよう。これは、欧米ではもともと早くから実践されているもので、各々の子ども達の学習面はもちろん、情緒発達にも、更には将来の社会的自立にも寄与するものである。ADHDが、米国でも日本でも、4%前後含まれることから軽視できない教育の課題である。学級経営困難——いわゆる学級崩壊の問題とも関連している。しかも、これらの子ども達が学校で適切に理解されていないために、親の育て方・しつけ方の問題として責められ、非常に苦しんでいる保護者もあり、学校と家庭の信頼関係を損ねている場合も多い。多様な子ども達の個々の幸せを考えて育てていく共通の視点を、学校・園と家庭が持ち、それぞれの子どもとどう関わり向き合っていくかを、適切にアドバイスする身近な専門家が不足していると思われる。

一方で、子どもの意志を尊重し、物心共に豊かに育てた家庭にも問題が生じている。子どもに親の価値観・家庭の方針や判断を伝えず、学童期・思春期を過ごしてしまう場合が見受けられる。親の価値判断の押し付けはないので、親子の対立や反抗は表面上は見受けられない。しかし、同時に子どもは、独自の価値判断も社会規範の拠りどころも持てないまま育ってしまう。そこに、子どもの購買

欲を煽る商品が、ゲームであれファッションであれ次々と出るので、絶えざる物質への欲求に気持ちに向かい、真の満足達成感や幸福感が得にくくなる。売る側の戦略的な情報操作で、子ども達は更に物質を得ることで渴望感を埋めようとしたり、友達との架空の連帯感・共通の話題性を求めていく。親の価値基準・判断を以心伝心ではなく、伝えていくこと、子どもの言い分を聞きつつ親の考えを示すことは、かつてなく父親にも母親にも難しい日々の努力が求められる。しかも、ありのままの子どもの個性を認め、評価尺度や比較でなく、わが子の価値を信じ伝えてこそ可能になってくるから、幼児期からの積み重ねも問われる。

#### 4 思春期以降に問われる親子の絆

小学校高学年以降で、思春期特有の子どもの問題と出合い、専門医療機関へ紹介したり、状況によっては学校の生徒指導専任教諭や児童相談所や県警少年相談保護センターと連携をとることで、子ども本人や家族を支援していく場合がある。拒食過食症(摂食障害)・家庭内暴力・校内暴力・自傷行動・抜毛症・脱毛症・睡眠リズム障害・性的アクティビングアウトを含む様々の非非行動・長期の引きこもり状態等々多様で、これらが単一または重複しており、不登校や学業不振も伴っていたりする。いずれも、子ども自身の生来の傾向だけでなく、家族病理が、現代の時代性をもって複雑に絡み合っている場合が多い。

そういった中で、近年強く感じるのは、思春期の子ども達は広く浅い対人関係は好むが、深く関わることをお互いに嫌い、思慮深い思考判断が苦手になってきている傾向にあり、とても傷つきやすいということであろう。それは悩める傷つきやすい乙女・青少年というのとはどうも違う。行動面では外にアクティビングアウトしていくし、一方で無為に引きこもりもする。そんな中で、深く思考する子が逆に「つまらない奴」といじめられたりする。

制限され傷つけられるのを嫌いながら、即時的即物的利那的の人間関係を広げていくのは好まれる。今や子ども達は、携帯電話やパソコン等親世代の思春期にはなかったアイテムを使い、24時間プライバシーを持つてしまふ。親はわが子の友人関係・精神内界について、例え自室に引きこもっている子でも、その外界との交流・行動・心の有り様を把握しきれなくなっている。これは非行少年とそれ以外の子という括りで理解されるものでは既ない。殺人等の重大事件や薬物汚染や援助交際等とわが子が隣り合わせに身を置いている。親は全く気付いていなかったり、例え知っていてもどうにも解決の手立てをなくしていたりする。相手を尊重しながらも、自らを愛し大切に守るための自己価値観や危機管理意識を子どもに授けてこなかった親子関係が、今や試されている。

メール文と会話文が相乗して、浅い思考判断を更に浅くしていくので、親子の話合いが全く成立しない場面に立ち会うこともある。親の方も、関心は子どもに迫った

進路のことや、携帯電話の料金にばかり向けられていたりする。学校の出席日数や成績等の数字は気にするのに、その奥のわが子の心の揺らぎを見ない。長いタイムで子どもの将来の幸福を見据えた視点で、今起きている心配事を考えられない。親は自信を無くし、適切な相談先を見出せず、途方に暮れてただ混乱している場合によく出会う。子どもの求めに応じて甘えさせてあげることができないのに、生活全般の約束事が話し合われていない分、非常に物心共に甘やかしていたりする。同時にここでも、乳幼児期に問われた、周囲と比較せずにわが子の個性・持ち味を丸ごと認めてあげることが何よりも求められる。

今回十分に触れられないが、家庭内力動・発達心理学の視点からは、乳幼児期には母子関係が非常に重要で、思春期には父子関係、特に男の子の場合とても重要であろうと考えている。しかし今日、離婚・家庭内離婚状態が増えており、一人親家庭もとても多い。様々の家族・親子の形態があっても構わないと思う。大切なのは、大人達がそれぞれの立場で、いかに継続的な努力をして、子ども達の成長に責任を果たした関わり、援助を、子どもと向き合って持ち続けていくかということである。それは、親権を持たなくなった実父にも、実母にももちろんだが、再婚した継父母にも課せられるものだと思う。同時に多様な家族の形態や経歴が、子どもの生活に不利益にならないような公的な支え、法整備等がフランスのようにもつと作られる必要があると思う。若年出産・離婚再婚の母親を含めて、公的な機関が親業のスキルを授け、親と

して育てていく支えを必要としている親達も多い。これらの視点が、個人のレベルでも社会資源としても実現されれば、昨今度々報道されている乳幼児の虐待死のかなりの場合が、予防できるのではないかと考えられないだろうか。

様々の非行の子どもの達の生育歴をたどると、可愛がられ、十分甘えさせてもらった経験の非常に乏しい子が多く、しかも3度の食事が、安心した家庭生活の中で幼児期から保障されてこなかった例が多い。思春期になり、暴力行為や性的逸脱行為や様々な加害者の立場になる少女少女たちの多くが、乳幼児期から学童期にはネグレクトや親からの暴力等むしろ被害者であったことは痛ましい。

また、親の期待に応えることで愛情をつなぎとめようとしていたかのごとく、無意識に「非の打ち所の無い、手のかからない良い子」を演じてきた場合にも出会う。時には生命に関わるほどに急激に痩せの進んだ拒食症候群・食障害であったりする。嵐のように破壊し始める家庭内暴力だったりする。

時代性を感じるのは、問題の表れ方に男女差が薄れてきている傾向が見られる点だ。ジェンダーがボーダレスになっているらしい。街を歩く若い男女の後ろ姿、時には前から見ても、その性の識別が難しくなってきたと感じる。実際、女性に多く見られるボディイメージの歪みも男性にも見受けられる。男性用コスメ品が出回り、中学生も次々買っていたりする。今後、女子の拒食過食と類似の心理

機制が男子にも多く見られるかもしれない。また家庭内暴力といえ、かつては男子がほとんどだったが、この数年女子の激しい家庭内暴力に出合い驚かされるようになった。なぜ性差が薄れているかは、親子関係の変容だけでなく、食生活の環境ホルモン等多様な要因が関与しているのだろう。

過剰適応の良い子は、乳幼児期・学童期には、親からも教師からもとても都合が良く、親は周囲から羨ましがられたりもする。思春期に、良い子が「良い子でいること」に疲れて降板した時、親は不意を食らったかのよう混乱し、わが子の現状と向き合えなくなる。子どもの危機を救えるのはやはり親が第一だが、その親もストレスからうつ状態になり、医療的ケアを一時的に必要とする場合もとても多い。身近に親子を救える専門家が必ず必要となってくる。

親子の心の健康で、とても重要であるのに壊れてきているのが、睡眠リズム・食生活習慣のあり方だと思ふ。これは乳幼児から思春期まで、世の中が夜型になり、食事がコンビニ、ファーストフード等外注型に頼る傾向にあるからだ。不登校児生が深夜までパソコンやゲームの強い光刺激を浴び、昼夜逆転に瞬く間になる傾向は非常に多く深刻である。

また、食生活の変化が、親子のコミュニケーションの食卓を危うくしているだけでなく、心の安定を脅かしていると思われる。近年、日本茶・豆製品・魚等の和食や和菓子等の食材が、感染防止や免疫機能を高めたり、

抗ガン作用の効能等が食品化学や医学の進歩で証明されてきている。同様に先人の知恵から伝えられてきた普段の日本食の中に、親子の心の安定、豊かさの基があるように感じている。

## 5 さいご

乳幼児から思春期までの親子の問題を、抽象的にかなり雑駁に述べてきた。家族の問題ではあるが、時代精神病理・社会病理がかつてなく影響しているのが、今の日本の特に都市部の状況と思われる。過去の事例がテキストにならない青少年の事件や幼児虐待も多い。家族個々の問題を早期に救うため、複数の機関の連携で支援していくことで光の見える例もある。個々の家族・子どもの問題を公的機関・民間機関の連携で、これからの将来を担う子どもを共に育てていく視点も必要であろう。

そのために、地域に身近な児童・思春期を診る精神科医や、幅広く親子を支えてくれる小児科医や、母子関係や家族病理だけでなく子どもの発達を見立て、温かく具体的なアドバイスをしながら深く関わっていきける資質を備えた臨床心理士等の相談やカウンセラーやセラピストの絶対数が、職域としてもかなり不足しており、もっと要請が潜在的ニーズとしてあると思われる。

〈横浜市教育総合相談センター・港南区福祉保健センターサービスクラス子ども家庭支援係 学校カウンセラー(臨床心理士)〉